

Contents

LIVING TOGETHER という戦略.....	1
kavcaap 2004	2
難しさと向かうこと (05)	4
VOICE' 04 開催	8
PLWHA ミーティング開催	10
PLuS+	11
第18回日本エイズ学会学術集会参加感想文	11
活動報告	13
書籍紹介	16

「LIVING TOGETHER という戦略」

ふれいす東京 生島 嗣

人は多くの感情を仮面の下に隠しながら暮らしている。「仮面」はパーソナリティという言葉の起源になっているとも聞く。LIVING TOGETHERの啓発手法は、「人の隠された感情を表出するための蛇口のようなもの」とは、aktaディレクターの張由紀夫さんの言葉だ。HIVに影響を受けた人々の「話さない／話せない」などの内に秘めた思いを間接的に浮かびあがらせる装置とも言い換えられる。

●何か役にたつことはありませんか？

1994年から、ふれいす東京事務所の片隅で、HIV陽性者からの相談に耳を傾けつつ感じていたこと。それは、HIV陽性者やパートナーたちが日常感じていることが、周囲の人たちには全く伝わっていないことだった。「BRIDGING THE GAP」という合い言葉でエイズ国際会議が開催されたことがあるが、ギャップは私たちの住むこの東京で、僕らの身近でパツリと口をあけている。その後、「自分にできることは？」と声をあげたHIV陽性者達との共同模索が始まった。ゲイ雑誌に原稿を提供したり、ホームページやイベントにて、HIV陽性者による手記集を紹介しはじめた。誰にどう影響が及んでいるのかも判らないまま、できる事を続けていた。

●手紙集&リーディング

2004年初頭、新宿2丁目aktaで開催する田口弘樹・写真展にて、HIV陽性者の声を来場者に届ける方法を検討していた。そこから生まれたのが交換日記のような手紙集。まずは、以前から交流のあるHIV陽性者や周囲の人たちに、誰かに宛てた手紙を直筆で書いてもらい、それを読んだ来場者も返信を書けるようにした。また、会期中のイベントとして、ゲストがHIV陽性者や周囲の人の手記を朗読し、自分なりのコメントを話すというシンプルな構成のリーディングを企画した。僕らにとってのHIV/AIDSを、彼らの語りを通じて、リアルに浮かび上がらせたいという思いがキャストイングにも反映され、コミュニティのプチ有名人、書き手と共通経験をもつ人など多様な顔ぶれがそろった。

リーディングについて、その後読み手として参加した美術評論家の橋本麻理さんは、「多くの人の言葉から、むすうの何か

が立ち上がった夜。この可能性の渦のようなものを拡散させずに、何かを始めていければ」と語った。リーディングイベントは、その後、大阪、名古屋、神戸などの地域イベントや学校でも取り組みが始まっている。

●カフェスタイルの場の可能性

写真展会場にて田口氏は来場者に、「僕はこの写真を撮っています。」と自己紹介。そして、「時間があったら、これ読んでみませんか。座ってどうぞ」と一言添える。「僕はいっすよ」、「なんですか、これ〜」と話していた人の顔つきが、手紙を読みすすめるうちに、変化していく。中には、感情があふれ出す人や、一度に読めずに、何度か来場する人もいたと聞く。普段、自分からHIVに関する情報にアクセスしない人もひきつける何かが、この直筆の手紙集にはあるようだ。

●何が新しいのか？

あるHIV陽性者が、VOICEのために制作したビデオのなかで語った。「普段、もっとSAFER SEXのことを話したいんです。でも、周囲の人は違うようで、非常に大きなギャップを感じます。もし、自分が強く話したいと主張したら、周囲は自分をどう思うだろうかと想像すると、言えなくなってしまいます。」これまでの予防啓発との大きな違いは、HIV陽性者が参加することで、はじめて成り立つ点だ。参加することへのハードルが低いため、様々な見えにくい声を紹介できる。「言わない／言えない」声を、手紙やビデオ等を通じ、見えやすくすることで、コミュニティのメンバーにリアルな現状認識を促し、自らの行動の振り返りを期待するものだ。

普段、HIV/AIDSに関する情報は、性感染症の予防、セックスの場面という文脈で語られることが多い。しかし、実際には友人、職場、学校、親子などの関係でも、出会う可能性がある。セックスの場面に特化されるあまり、こうした日常のなかでの出会い方については、すっかり抜け落ちていくことに気づく。若い人だけでなく、多くの市民に関係の深いことなのだ。他人事から自分のこととして感じるための仕掛けとして、「LIVING TOGETHERの戦略」が大きな役割を果たすのではないだろうか。

kavcaap 2004

2005年7月に神戸で開かれる第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議（7th ICAAP）のプレイベントのアートプログラム、kavcaap 2004が2004年12月1日から5日間、神戸アートビレッジセンター（KAVC）で開かれました。ふれいす東京は、Living Together 写真展、手記リーディング、成果発表会に企画・協力して、新しい啓発手法に取り組んでいます。

■「公共の場での表現

～kavcaap 2004プロデューサーとして思っていること～
ブブ・ド・ラ・マドレーヌ

本年度の「カブキャップ」は「kavcaap 2004『遠慮は無用！』エイズをめぐる5つのダイアログ」と題して、先日12/1～5、神戸アートビレッジセンターで開催された。この「カブキャップ」は7th ICAAPのためのアートプログラムと位置付けられている。アートプログラムだが、いわゆる「美術館」や「劇場」で行われなかったところが重要な点で、この神戸アートビレッジセンターの特に1階のカフェスペースは「公共空間」として、地元の人や「アート」に特に関心の無い人も利用できるようになっている。

ところで、活字では初めてカミングアウトするが、私はHIV/エイズ啓発活動やセックスワークのネットワーク者としては桃河モモコ、アーティストとしてはブブ・ド・ラ・マドレーヌというふたつの名前を使い分けている。

さて、なぜ7th ICAAPの「ために」アートプログラムが必要なのか。それは、「カブキャップ」の言い出しっぺのひとりである私には「アート（＝芸術または表現されたもの）」は「イメージの予防と治療とケア」に有効である、という確信があるからだ。この場合のイメージとは、病気やセックスや死ぬことや自分自身についての否定的なイメージのことだ。「私は（あいつは）どうせ…なのだからしょうがない」といった感覚とでも言うか。この「…」にはHIVの状態や性別やセクシュアリティや年齢などの社会的立場や自認が含まれる。この感覚が、例えばセーフターセックスの工夫の意欲を萎えさせたり、治療行動や支援体制の向上を妨げたりする、と私は思っている。そしてその「表現されたものの可能性」を信じる人々の努力と支援によって、「カブキャップ」は実現してきた。特にふれいす東京のみなさんには、様々な面で支援をいただいている。この場を借りてお礼を申し上げたい。私自身は、先に挙げたふたつの立場と動機からこのプロジェクトに関わっている。

私が最初に知った陽性者の友人はかつて「HIVの感染から身を守る方法は今では多くの人知っているが、イメージの感染から身を守る方法は誰にもわからない」と言った。手記や手紙を読むこと、朗読を聞くこと、パンフレットや写真やビデオを観ること、音楽を聞くこと、そしてだれかと話すことで、何かが変わる。そういうことを人は多かれ少なかれ知っている。一方で、自分がそもそも持っている「イメージ／ものの見方」に反するものに会って不快や嫌悪を感じる人もいるだろう。

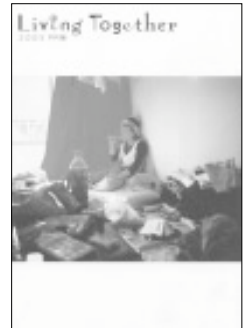


写真展の一角で、手紙集を読むことができる



HIV陽性者やその周辺の人たちの手紙集

Kavcaap 2004の会場で、例えばある日の午後、観客は何を見ただろうか。展示スペースでは、澤田知子さんという新進気鋭のアーティストの写真作品と、HIV/エイズやゲイコミュニティの現場で淡々と「撮ること／撮られること」と向き合ってきた田口弘樹さんの写真が並び、その前で青い表紙の本を男の子が熱心に読んでいる。見るとHIV陽性者やその周囲の人の直筆の手紙のコピーが綴られている。コーヒーの香りが漂うカフェスペースでは、セーフターセックスについての講義の輪の傍で、競艇帰りのおちゃんがビールを片手に耳を澄ましている。帰ろうと思ったら、スタッフらしき人に一冊のパンフレットを手渡される。赤いパンフレット。でもその赤は、「感染した血」のイメージではなく、赤い毛糸の帽子、イチゴ味のドロップ、バレンタインデーチョコのリボンの赤のイメージだ。凝った字体に思わずタイトルを声に出して読んでみる。「リビング・トゥゲザー」。



Living Together PR版

こんな場所が各町内に一ヶ所ずつ、いつでもあったとしたら。

しかし、「表現されたもの」は新たな誤解や幻想を生み出すし、その生産にはお金もかかる。だからこそ表現の質は常に問われるべきだと思うし、これはマネージメントを含む表現する側と観客との間の、批評を含む真摯なやりとりが育てていくものだと思う。日本では今だに、裸婦像か、さもなければ巨大な鉄の塊を駅前に設置して「公共芸術＝パブリックアート」と称し、数千万円を投じている。私は、「パブリックアート」とは、公共の場で育まれる文化様式が生むものであって、表現する側の切実さと配慮（または作戦）が鍵だと思っている。それを育むのは困難な作業ではあるが、それを継続／伝承していく意欲や勇気を生み出すのもまた「表現されたもの」の持つ力だと信じている。

■「読む人の存在が生み出す可能性

kavcaap 手記リーディング報告記

宮田 一雄

2005年7月に神戸で開かれる第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議（ICAAP）のプレイベント、kavcaap 2004が世界エイズデーの2004年12月1日から5日間、神戸市兵庫区新開地の神戸アートビレッジセンター（KAVC）で開かれた。

kavcaapはアートを中心にしたイベントであり、エイズとの闘いの中でアートはどのような役割を果たせるのかを探る一方で、エイズの流行に直面して私たちはどのような表現の可能性を切り開くことができるのかという野心的な問題意識も抱えつつ、国際会議本番に向けて2003、2004と二度のプレイベントを開催してきた。とりわけkavcaap 2004は、表現の原点ともいえるべき「対話」を重

視し、毎日ひとつずつ対話に焦点をあてたプログラムを用意してエイズと表現の微妙な関係に鋭く切り込もうとした点に特徴がある。

このプログラム構成は実は、総合プロデューサーの桃河モモコ氏、およびkavcaap実行委員会に参加した関西の若手アーティスト、アートマネジメント専攻学生らの長期にわたる準備の見事な成果なのだが、同時に「ぶれいす東京」の支援によって実現可能になったという側面もあった。2日目の『LIVING TOGETHER TALK 1:セクシュアル・ヘルスってナニ? Part2 ~ケアと予防を見通す戦略~』、および最終日の『LIVING TOGETHER TALK 2:手記リーディング』の二つの対話プログラムは、「ぶれいす」が企画、実施の両面で全面的に協力しているからだ。

kavcaap 実行委員会の働きの悪い顧問であり、同時に「ぶれいす」のこれまた働きの悪いことで名高い理事でもある私としては、この場を借りて日ごろの汚名を返上すべく、関係各位に深い感謝の意を表するとともに、手記リーディングの様子を報告したい。

私の理解する範囲で手記リーディングを簡単に説明すれば、それはHIV陽性者およびそのパートナー、家族らの手記を他者に読んでもらう機会を提供するための会合である。書き手とは別の人物が読み手となり、集まった人に手記を読んで聞かせたうえで、さらにその手記を読んで感じたことを伝える構成をとっている。

こうした形式は、HIV感染にまつわる社会的なスティグマや差別の存在（あるいは存在の可能性）のために、現在の日本ではHIVに感染した人たちの姿が見えにくいことから、やむを得ずとられたのではないかと私は想像している。ただし、読み手としての第三者を介在させたことで、そうした現実に対する消極的な対応のレベルを超え、新たな魅力を持った興味深い表現の手法を開拓しつつあるようにも私には思える。

12月5日午後3時からほぼ3時間にわたって開かれたkavcaapの手記リーディングは、関西では初のお目見えであり、読み手も関西中心に以下の方たちに引き受けていただいた。

映画ライター 寺田正廣
兵庫医科大学病院ソーシャルワーカー 伊賀陽子
学生/柔道部OB ケンゴ。
寝屋川市立男女共同参画推進センターアドバイザー
..... 坪井真規子
シャンソン歌手 シモーヌ深雪
フリーライター 稗田和博
学生 えびはら
アーティスト/エイズアクティビスト/actaディレクター
..... 張 由紀夫

職業などのバックグラウンドは多様である。性的指向については、あくまで私の想像だが、たぶん多様である。エイズ対策へのかかわり方もまた多様であった。親しい知人をエイズで亡くした経験を持つ方もいれば、HIV陽性者とはまだ、会ったことがないと思っている人もいた。したがっ



リーディングの様子

て、手記を読んだ後のコメントも、身近な人の死に話が及ぶこともあれば、正しい知識を伝えることが大切ですよといった啓発的な呼びかけにつながることもあるなど、これまた多様であった。

手記リーディングの成立には二つの条件が必要である。一つは多数の手記が寄せられること。HIV陽性者の典型などといったものはなく、それぞれ異なる人間であることは大前提でもあるが、この条件は「ぶれいす」のHIV陽性者への地道なサポート活動の結果として確保されているように思う。また、HIVに感染する人が増えていること、その多くが匿名の手記でなければ自らの意見や思いを表明しにくい現状があることも手記のストックの充実を支える結果になっている。

第二の条件は読み手の確保である。いろいろな立場の人が読み手として参画することがリーディングを魅力あるものにしていく。kavcaapには8人の方が読み手として参加した。その人選は企画の勝負どころといってもいいだろう。

映画ライターの寺田正廣氏は、雑誌の編集にも携わる立場から、手記の編集性といったものにも言及した。手記を書く存在、それを伝える存在はそれぞれに「編集」という作業を行っている。このことを情報がメディアを通じて多数の人に伝えられる高度情報化社会の類推としてとらえる視点は、マスメディアの一端に連なる私には魅力的であった。

また、寺田氏が読まれた手記には、カリニ肺炎で入院していた当時、手記の書き手が友達から「あんた、いつまでも“悲劇のヒロイン”ぶっているんじゃないよ!! AIDSだからって普通に生活できないわけじゃないんだから!! しっかりしなさい!」と怒鳴られたというエピソードが出てくる。

この点について寺田氏からは「彼はドラマクイーン化していたが、それは彼がつらさを乗り越えるために必要なことだったのではないか」といった趣旨の言及があった。ドラマクイーン化がづらいことを乗り越えるための心理的な安全弁の役割を持つなら、必ずしも否定すべきこととはいえないといった意味であるように私には思えたが、こうした見方には反論も予想されるし、ドラマクイーン化をめぐる手記の書き手と読み手である寺田氏の受け止め方にも微妙な差異があるかもしれない。そうした差異がもたらすダイナミズムにも、リーディングが持つ潜在力として期待したい。

■「研究成果発表会『セクシュアル・ヘルスってナニ? Part2』 報告」

吉田 成美

ぶれいす東京では代表の池上ほか、多くのメンバーが厚生労働省関係の研究事業に関わっています。こうした過程で得られた研究成果を幅広く一般の方向けに発表する機会が、(財)エイズ予防財団主催の研究成果発表会という形で、12月2日に「セクシュアル・ヘルスってナニ? Part2」と題して神戸アートビレッジで行われました。

私吉田は、この発表会の事務方として運営に関わりつつ、発表会に出席して参りました。当日は、やはり発表会の一部門である「田口弘樹写真展」会場にて、ほぼ定刻通りに始まりまして。写真展の会場を兼ねていたせいか、多少の人の出入りはあったのですが、用意した椅子が足りなくなり追加するほどの方々にご来場戴きました。

田口氏の"Living Together"をテーマにした暖かい写真に囲まれる中、池上から「ケアと予防を見通す戦略」についての発表が始まりました。「性の健康」の推進に関するぶれいす東京の取組の紹介のあと、HIV陽性を告知された人の人間関係の広がりに関する調査結果が報告されました。自分が陽性者であることを伝えた人の範囲や人数についての調査が



左から、エイズ予防財団の桜井さん、生島、池上、一番右が kavcaap 総合プロデューサーのブブ・ド・ラ・マドレーヌさん

らは、55人の陽性者本人から、804人の周囲の人に情報が伝わったという結果が報告されました。陽性者が話しやすい・不利益を被らない環境づくりが、社会の理解を促進するために重要であることが示されました。また、陽性者の立場から

のさまざまな体験談や声として手記が何編か紹介されました。

その後、女子・男子・MSMの3つの対象群につき、コンドームを使えない／使いにくい要因をさぐった調査結果が報告されました。その結果、3つのグループの間には特徴的な差があることが判りました。(Newsletter40号、p.2の「研究成果発表会〈1.性の保健行動とジェンダー〉」をご参照ください。)

続いて、若者をターゲットとした「性の健康」についての冊子や、専門学校と協働した、HIV/AIDSに関するポスター作りなどの例も紹介された後、今回のテーマ"Living Together戦略"についてのまとめに入りました。「ケアと予防」は相対立する概念ではなく、陽性者が自らやそのパートナー

の「性の健康」を思いやるという「セルフケア」そのものが、周囲の人への「予防」啓発活動たり得るとのこと。言い換えれば、陽性者が地域の中でより自分らしく生活するための「環境づくり」が、市民一人一人の「他人事→自分事」への意識転換になる。「予防」でもあり「ケア」でもあるということです。

ここで会場は一旦休憩へ。その後、池上からの「性の健康に関する青少年の質問分析」についての解説を交え、kavcaap総合プロデューサーでもあるブブ・ド・ラ・マドレーヌさんと生島の司会による、質疑応答タイムへと進みました。会場からは、「コンドームをうまく使いこなせないという不安が、Sex経験の多少と関連があるか」といった、研究内容に直接関係する質問から、「女性用コンドームの普及状況は」「検査前カウンセリングの有効性は」といった教職や保健所の現場の方からの実際的な質問、そして「献血時の検査とエイズ検査の時とは、病院の雰囲気や周囲の目線が違った」「献血前の質問票にて『同性間の性行為の有無』にマルを付けたら、献血を断られた」といった実際の体験談まで、参加者のさまざまな立場を反映した質問や意見が寄せられたことが強く印象に残りました。

尚、kavcaap2004の一連のイベントのうち、Living Together 写真展、手記リーディング、研究成果発表会(財)エイズ予防財団主催の研究成果等普及啓発事業として開催されました。

難しさと向かうこと

シリーズ第5回目は、HIV陽性告知後にめぐり会い結婚をした、50代(一)／60代(十)のご夫婦にお話を伺いました。さまざまな価値観や人間関係があり、それぞれの人生のステージがあります。ひとくくりにはできないそれぞれの物語があります。

★聞き手：生島 嗣

(05) 人生設計をしないということ

陽性告知後の人生での「めぐり会いと結婚」

★まず、お二人が出会ったころのお話からしていただけますか。

[Tさん(夫):以下、T] 4、5年くらい前だと思んですが、「生前契約」という新しい法律ができて、その勉強会があったんです。たまたまわたしも出席し、彼女も出席していたんです。話すきっかけはその帰りでした。会場から下りていったら、雨が降っていて、信号があって……。わたしが勉強会で質問をしていたので、彼女が「あれはどういうことだったんですかね」と尋ねてきたんです。

[Mさん(妻):以下、M] 会場は70人くらいだったと思うんですが、質問した人は何人もいなかったものですから、なんとなく印象に残っていました。質問した内容がわたしも興味があったものですから、それに対する主催者のお答えは的確でなかったような印象をわたしは受けていたんです。本人がたまたま階段を降りて、出口のところで雨宿りしていたので、「失礼ですけども先ほど質問されたかたですよ」ってお話して、「あの答えは納得されましたか?」って聞いたんです。そしたら、いや、納得していないってことで、そこでちょうど信号が変わったものから、じゃ、ちょっとお茶でもってということになりました。

[T] このグループは危ないって思ったんです。「生前契約」を前面にうたっていて、亡くなってからの後始末をしますという組織だったんですが、亡くなった方はその後のことを見られないわけじゃないですか。ところが監視する人も同じグループの人だったもので、危ないからやめたほうがいいですよっていうことを言いたかったんです。ナンパじゃなかったんです(笑)。

[M] わたしは長い間結婚生活があったんですけども結局一人になってしまい、子供がいませんから、後始末をしてくれる人がいないんですね。兄弟も兄が二人いるんですけども、他人のほうがスッキリしていいかなと。わたしはこの病気にかかっているのがわかっていたので、当時は死期がそんなに遠くない将来にくるんじゃないかって思っていました。ですから荷物の整理や、いつ入院してもいいような準備とかもして、わたしにとっては「生前契約」のことも差し迫った問題でした。

★喫茶店でお話をしていたときのお互いの印象はいかがでしたか?

[T] 印象は悪くありませんでした。ただ、今聞いてきた勉強会の話が頭の中いっぱいだったんですかね。

[M] テーブルの上にお互いにノートを広げてメモをしたりし



ながら話をしていたんです。こういった勉強会が他にもあるので情報が手に入ったらお教えしますよって言われて、ノートを交換したら電話番号も住所も書いて戻ってきたんです。わたしちょうどそのころ一人暮らしを始めて間も無い頃で、わりと警戒心があって、電話番号だけだったらいいかなくて思ったんですけども、悪いかなあって思って改めて住所も書いたのを覚えてます。

[T] 何ヶ月かたって、地方裁判所でやはり「生前契約」の勉強会があったんです。それで連絡をしました。

[M] 会場はものすごい人数だったんです。だけど一番後ろで、入ってくる人がわかるように立っていて、席を確保してくれていたんです。気のつく人なんだとちょっと思いましたね。

[T] それで、一緒に勉強会に参加して、帰りに夕飯食べにきました。

★お互いにシングルだということなども話されていたのですか？

[M] まさか将来いっしょになるなんて思ってもいかなかったし、わたしは感染者だし、再婚ということはありませんって思っていましたから、ずっとわたしは一人なんだって、もうずっとそう思っていましたから。特に身辺状況や、もちろん病気のことも話はしなかったですね。

★その後お二人の関係はどうなっていったのですか？

[M] 2ヶ月ほどしてから、住んでいるところの近くに、お祭りがあるから行きませんか誘われたんだと思います。

★勉強会以外に誘われた側の気持ちはいかがでしたか？

[M] ひとりで暮らしていて特別に変化がある日常でもなくて、かといって、お祭りが好きなわけではないんですけども、誘っていただいたものですから、まあ出かけてみようかなと思いました。特別意識はなかったけれど、よく気のつく人だな、それだったら出かけてもいいかなと思いました。

★その後、デートを重ねることになったのでしょうか？

[M] そうですね、案外あれから付き合いは密度が濃くなったのかもしれないですね。その後、車であちこちへ出かけたりするようになりました。

★奥さまは実はそのころ「ずっとわたしは一人なんだ」と思っていたわけですよね。そんな仲で始まったお付き合いですが、どんな風に感じていらっしゃったのでしょうか？

[T] 最初はあまり気にはしてませんでしたけど、まあちょっとなんか歯茎に小骨がはさまったようなそういうところが言動にしる、行動にしる見受けられるところはあったんですね。積極性が無かったです。何事に対しても淡白でした。

性格的にそうかなって思っていたんです。ところが後になってみると、病気のことがすべてを後ろから引っ張っていたんだなって思うに至ったんです。本来のこの人の性格が出ているんじゃないなって、後になってから気づきましたけどね。

★その気づくまでのプロセスをちょっと詳しくお聞かせ願いますか。当初、奥さまがHIVという病気をお持ちだということは、ご存じなかったんですよね。どのようなきっかけがあったのでしょうか？

[T] 彼女がそのとき服用していた薬は、厳密に時間ごとに飲む薬だったそうです。



[M] この年になれば何か薬を飲んでもそんなにおかしくはないだろう、不思議に思わないだろう、仮に思われてもなんでもとにかく飲まなくちゃと……。朝7時に飲んで、8時間ごとかしら、お昼に飲んで、3時があって、夕食後と寝る前11時があって、5回かしら。あと水をたくさん飲まない腎臓にわるい影響を与えるというので、がぶがぶ飲んでいました。

★旦那さんの目の前でも服薬はしていたんですね。

[T] ええ、飲んでいましたね。ふつう薬飲んでいたら、胃の調子がわるくてとか、心臓が云々とか言うじゃないですか。そういうことも一切言わないので、或いは何かあるのかなとは思いました。ただ、そこは本人のプライバシーのことだと思わして聞きませんでした。

[M] 後で知ったんですが、そのころこの人は保健所に行って相談したらいいですよ。ぶれいす東京にお邪魔するようになったのもそのころじゃないかしら。わたしは何も話してないですよ。なぜだかHIVじゃないかって勝手に決めてかかったみたいです。決定的なことはなにもなかったはずなので、今思うとほんとうに不思議なことなんですけれどもね。

★彼女の消極性と、薬を飲んでいるという行動が結びついたんですね？

[T] そうですね。彼女と近づきたいと思うようになってきていたのだと思うんです。でも何だか距離をおかれているような感じがして、これは何かあると勘が働いたんでしょうね。気楽に話がしづらくなった気がしていたもんですから。

[M] だんだん特別な感情みたいなのが何となく伝わってきて、あーこれはいけないなあ、これはちょっと突き放すというか、敬遠しないといけない。でも引くにしてもただ引き下がるんじゃないかなと思ったりして、それはわたしはとっても悩んだんですね。

でも、どちらかだなあと思って……。本当のことを話してずっと去っていくようだったら、そういう人だったんだということ、それは仕方ないことだなって。そういう確率のほうが高いかなと思ったんですけど、気持ちの上で言わないわけにはいかなくなるような状況になってきたんです。やっぱりここは言わなきゃいけないかなあと。

★どんな場面でお話されたのですか？

[M] 食事をしているときとか、お茶をのんでいるときとか周りに人がいるところは話しにくいなあって思って、初めてなんですけれども、わたしの一人暮らしのところに来てもらいました。

[T] まさか部屋に来てくださってというような展開になると思ってませんでしたけれど、ああ、なんか重大な話があるかなと。もうお付き合いをこれきりにしましょうというのに、なんで部屋に呼ぶかなという気も片方でしていましたし……。

★実際に病気のことをお話ししたら、どんな反応があったのですか？

[M] わたしが思っていた感じとはちがう受け止め方をしたんです。引くんでは無くて、ささえてくれる形に出られたんです。

[T] あの時の気持ちは、非常にうれしかったですよ。話してくれたということが。信頼できる人でないと、話せないわけですから、信頼してくれて話してくれたということで、やっぱりうれしかったですね。

HIVって不当に差別されていたじゃないですか。一番最初に問題になったときに、厚生省だってそうだし、医者だってそうだったし、病人に対して何事だって思いがあったんですよ。マスコミなんかもそうでした。それで、彼女の話聞いたとき、抵抗はなかったです。それに、すでにふれいす東京でもある程度勉強させてもらってましたしね。差別というものに対していくらかでもお手伝いできればという思いが強かったように思います。

小さいころ、父親が寝たきりでずいぶん冷やかされましたから。おまえと遊んだらお前の親父の病気がうつるからとか。ある程度ものごとが分かる年齢になるまでは嫌な思いをしてきましたけど、わたしにも助けていただいた方がいらっしやいます。わたしも出来ることがあればという気持ちのほうが強かったですね。

★奥さまが想像していた反応と全然ちがう反応だったわけですね。

[M] やっぱり、わたしの目に狂いは無かったのかなって、どこかで(笑)。半分以上は先ほど申したように、去っていくだろう、それは当然だろうって思っていました。ただ、心のどこかで、支えてくれるんだって信じていたような気がします。去ったら去ったでそれはいいと思っただし、情報をどこかに漏らすというような人でないことは明らかでしたから。

★それ以来は旦那さまと微妙な距離感というのはなくなりましたか？

[T] 自分の場合は距離感なくなりましたね。ですから、野球見に行こうとか、どこそこのお祭りにいこうとか、いろんな誘いができるようになりました。

[M] 何も隠すようなことがない状態ですのでリラックスしてお付き合いできるようになりましたね。

★それからお二人の関係はどんな変化をしていったのでしょうか？

[T] 見てたら、やっぱり1日に5回薬飲むのはしんどいですよ、だれかそばにいないと。ある夜、11時ころ電話したら、うつらうつらしながら薬の時間を待っていたようなんですね。それがきっかけで一緒に暮らそうと思うようになりまして、そう言いました。それからじゃないでしょうかね。彼女のことを女性として意識するようになったのは。連れ立って歩いていて、自慢もできましたし(笑)。

★一緒に暮らそうって言うのはいろんな意味に取れると思うんですが、プロポーズだったんですか？

[T] あの時は結婚するという、戸籍上まできちんとするというのは、わたしのほうにはなかったんです。あくまでも手助けするには、そばにいないとということと言ったわけですから。

けれども女性のほうからするとそういう関係というのは好ましくないんじゃないですかね。彼女は籍をきちっとしたいというもんですから、そう望むのでしたら、そうしましょうということで、入籍することにしたんです。

[M] わたしとしてはこの年になって籍を云々というのはこだわりのタイプではないんです。ただ、今までの生活を、名前を変えてガラッと変われたらなーという気持ちがあったんです。

★ガラッと変えたい？

[M] 変えたい。過去をなくしたいというわけではなくて、今までの生活をガラッと何もかも変えて、名前も変えて、住む場所も変えて……。

硬い考えではないんですけども、性格的に中途半端なことが嫌いなんです。経済的な話をすると、一緒に暮らしても遺族年金をもらえるわけですから、入籍するとそれがもらえなくなるわけですよ、でもそういう金銭的なことは二の次でしたね。ガラッと変わりたいって。

だから、友達にも知り合いにも、「結婚したのよ」っていう形で知らせました。「結婚するの」って言うと、いやちょっと待って、よく考えてとか、絶対言われると思ったんで、「したの」って。さすがに兄弟には「したの」とは言えないから、兄二人には入籍する1週間前に紹介かたがた話しに行きました。1週間前だったので、さすがに兄達も驚いていましたけど、でも若者じゃないのでね。

★旦那さまとしては結婚をどのようにお考えになっていますか？

[T] 結婚そのものもそうですし、この人に対する責任も出てきたなっていう思いもありました。婚姻届の提出は夜になってしまったのですが、ひとつ重たい責任と、病氣と闘って毎日を過ごさないと、との思いが強かったです。そして「良かったね」という時間を過ごしたいなと思いつつながら役所の廊下を歩いたのを思い出します。

★「良かったね」というのは？

[T] あの時ああやって役所に届けを出して、10年なり20年なり寿命が分かりませんが、先々になってですね、「よかったね」、いい時間だったねっていうそういう時間をすごしたいと思いました。

そういう話し合いをした覚えはありますね。病気をハンディとはしたくないと思ったんです。やっぱり、みんないろいろなものを持っているわけですからね。これは我々のハンディじゃないんだと。たまたまこの病氣なんだからと。ほかの病氣とまったくおなじなんだからと。最近では彼女もやっと意識が変わってきてくれたみたいですけどもね。

★この病氣に対する意識や、ご自分の将来を見通すスパンはどのように変わりましたか？

[M] 当時は医者からもただ薬を出してもらっているだけといった感じでした。精神面のフォローとか、まだまだ元気でいられるんだからってそういう話は一切なかったですし、わたしもこの病氣の勉強をしようという気持ちはあまり無かったです。そのうちお迎えが来るんだろうと思っていました。身辺整理をがむしゃらにやっていたですね。今は何にもしてないんですけども(笑)。

★そのころの奥さまを見て、旦那さまはどういう風にお感じになっていたんですか？

[T] おれいす東京にもお邪魔するようになって、上手く付き合えば自分の寿命が尽きるまで生きられるんだって知識を得たもので、それを少しずつこの人に話をしていったわけです。転院することもできるし、薬ももっと楽な方法もあるんだよって。でも「わたしはいい」って言っていたんです。

[M] また一から、病院に行ってこの病気に向き合って話すというのはちょっと億劫でしたね。とても臆病になっていましたので、なんか晒されたくないという気持ちはありました。慣れるまで嫌な思いするかな、だったら今の薬飲んで、そんなに数値も悪くなっていないし、まあいいかなと……。

当時、医療関係でも4割以上が病院の中で拒否をするとか、この病気の人の手術を嫌がるって新聞の記事を読んだことがありました。わたしが通っていたところも総合病院なのですけれど、歯科にかかるのも大変だったし、皮膚科も大変、婦人科でした。この病気が婦人科にも関係があるから検査してもらったほうがいいとか、本で読んだのですけれど、婦人科のほうにまわしましょうかという話を先生のほうからは無いし、結局は自分から婦人科に回してくださいとお願いして検査してもらったんです。あちこち敷居が高いんですね。

★他の陽性者と奥さまを会わせたいということで、コーディネーションしてくれないかとたのまれまして、お手伝いをさせていただいたことがありました。

[M] 実際に経験豊富な病院に通っている方のお話を聞かせていただいて、心強く思いましたね。専門のかたが相談にもなってくれるということで、ずいぶん違うものだなと。病院を移ってもいいかなとそのときに思いました。

★実際に転院されてみて、前の病院と、移った先の病院をくらべて、もっとも大きな違いはどんなところですか？

[M] 例えば歯科の診療をしばらく受けてませんでしたので気になってたのです。転院後、すぐに歯科を紹介していただいて治療することができました。そして婦人科のほうも3ヶ月に1回か、2ヶ月に1回受診するようになりました。歯科、婦人科も担当の先生がいらっしゃって、一般の患者さんを見ながらですけれども、気兼ねなく検診できるのは心強いです。

[T] あと薬ですね。薬を変えてもらって、1日2回で済むようになったのは大きいです。この病院にたどり着くまでは、一日5回もの服薬でQOL(生活の質)をなんとかしなければという気持ちがありましたから、わたしも一安心なんです。

★二人で暮らすようになって、どんな風に生活は変わりましたか？

[T] そうですね、わたしは、自分では気づかなかったですけども、近所の友達からは〇〇さん顔が優しくなったって(笑)。

[M] ひとりで暮らしているときに、あんまり自分ではがんばっているつもりはなかったんですけども、肩肘張って暮らしていたんだなというのがこのごろわかります。相談する相手がいる、話ができる相手がいる、何にも垣根がなく。大きな違いですね。一人で何でも片付けて、一人で何でも進めていく。これでいいのかなと思いつつも、一人で。

もともと、性格的に人に相談するって言うのが苦手なんです。誰かに「困ってるの」とか、そういう話が出来ないタイプなんです。結局ひとりで背負って……。今こうして一緒に生活をしていると、あの時はずいぶん一人でがんばっていたんだと思います。

★今は、5年前とくらべて人との付き合い方も変わったんでしょうか？

[M] この病気がわかってから、とにかく一番仲のいい友達とも会いたくない、むしろ一番仲の良かった人ほど辛くて会いたくない。うそをついているようで、なんか隠し事をしているように会いたくない、出来たら交際を打ち切りたいと思っていました。だからましてや、新しくお友達をつくるとか、そんなことは考えられなかったですね。それが新しく生活が始まって、いろんなところに顔をだすようになりました。お花を習いにいって何となく付き合いができたり、パソコンも習いにいって、それから今はパッチワークでお友達ができて食事に出かけたりするんです。わたしの中では病気ってというのが大きなウエイトを始めていたんですけれども、今は薬を飲むときくらいしか思いたくないんです。

前の職場で仲良かった人たちとも、一切会いたくないという感じで当初はいたんですけど、いま、また復活して電話で話したりとか、それほど積極的ではないですけども、当初のころとくらべると大分やわらかい気持ちになっていますね。

[T] 究極の変化は人の世話をするような気持ちが出てきたことです。お嬢さんの相談とか。

[M] 元の職場で一番仲が良かった友達がいて、遠ざけたという気持ちがいっぱいだったんですよ。その人のことをふっと思ひ出して、娘さんが年頃の人がいるっていうのを思い出して、どうなの？ってきいて、上手くいけばいいかなと、お世話をさせていただいているんです。遠ざけていたと思っていた友達の娘さんの世話をしている、とても大きな変化ですね。殻の中に閉じこもっていた生活から、人のことに目がいくようになるなんてね、思っても無いことでした。

★将来を見通す先の長さも変化をしましたか？

[M] ええ、まだ生きられるかなって。実は今日、車の免許証の更新に行ってきたんです。わたし運転しないんで、ゴールドなんですけど(笑)。5年前ってちょうど大変なときで、独りになったばかりで、「ああ、次の書き換えは無いな」って思いながら警察に行った記憶があるんです。次の書き換えがちょうど今日だったんですよ。5年生きたんだわってね。だから、まだもうちょっとがんばれるかな。日常ががんばって生きているという感覚はないんですけども、楽に暮らしてますしね。

いまこうして振り返って話をする事ができるのも、時間と、そばに理解してくれる人がいるからだと思います。最初のころだったらとても話せなかったでしょうけどね。

★どうもありがとうございました。



～お二人より編集後日談～

人生って思わぬ転換をするものです。インタビューを受けて、自分たちのことを改めて振り返ることができました。貴重な経験をさせていただいてありがとうございました。何年かたったら、続編を載せていただきたいと思います(笑)。

VOICE' 04 開催

11月27日に四谷区民ホールにて、ゲイ・バイセクシュアル男性向けHIV啓発イベント、VOICE' 04が開催されました。今年は、来場者394名、スタッフ40名、出演者70名。一年に一度の大イベントとなりました。

(主催：(財)エイズ予防財団/ぶれいす東京)



「VOICE' 04 報告」

NOBU

VOICE' 04はGフレにとって今年一番のイベントとなった。当日は去年とうって変わって快晴のなか、朝から当日ボランティアも多数駆けつけてくれ、去年参加したスタッフを中心に、「スタジオ・スタッグ」さん「フライング



司会のエスムラルダさん&ベーすけさんステージ)さんに協力いただき、慌ただしの中にも余裕をもって本番を迎えることが出来た。

司会は、お馴染み、ベーすけさん&東京都公認大道芸人ドラッグ・エスムラルダさん。お二人の絶妙な駆け引きに会場から笑いが絶えませんでした。今年のVOICE' 04第1部は「バビ江ノビッチ&エンジェルジャスコ&メイリームー」さんの華麗なドラッグショーで幕を開けた！そして今日のために博多から駆けつけてくれた、「おわっとう」の三人による力強い歌声は外の寒さを忘れさせてくれた。続いて登場した「YASUMASA」さんはダンサブルなナンバーとバラードを披露してくれた。そして第一部最後は8回目を迎えたVOICEの原点でもある、HIV陽性者とパートナーの方々の「生きた声」のビデオ上映。来場者の方々の様々な思いの中間かい拍手に会場が包まれた。

第二部は弦楽合奏団「ディベルティメント」による演奏。今年も指揮者？エスムラルダさんとのコラボレーションも見せてくれ、普段あまり耳にすることの少ないクラシックの演奏の中にも歌謡曲を織り交ぜ素敵な調べを奏でてくれた。続いて男性合唱団「スキンエコー」の皆さんによる男声合唱団らしい素敵なコーラス。そして、ベーすけさんによるピアノ漫談「今年「瞳を閉じて」をオリジナル編曲で演奏してくれました。何年ぶりかで登場してくれた「ブルボンヌ」さんのショーには会場から爆笑の嵐が！最後に登場してくれたエスムラルダさんとの見事なドラッグショーの後、フィナーレは今年も全員で「世界に一つだけの花」を合唱して幕を閉じた。

今年のアンケートには来場者の約半数にあたる197人の方に協力いただいた。20代から30代を中心に、10代から50代の来場があり、遠方からも来場があった。また、周りに感染者の友人知人が居る人の割合が高く、他人事では居られない時代になっている事がうかがえた。出演者に対しては、「もっと観たかった」「とても楽しかった」などの意見が多くとても満足してもらえたようだった。ビデオ上映も「初めて感染者の生の声が聞けてHIVをととても身近に感じた」などの意見が多かったが、「口のおおうつしがキモイ」という意見もあった。全体の反省点としては、若干音響面や上



フィナーレ合唱



バーやクラブにコンドームを配る「デリヘルボーイ」がVOICEの会場にもデリバリー

演内容などでのリハーサル不足や、「もっとHIV/AIDSに関する情報が欲しかった」などの意見に対する検討が課題になりそうだ。

「VOICEボランティアに参加して」

たかし

そろそろVOICEの準備をしない？という声が始まってきたのは6月下旬。まずは今年のテーマを決める必要があった。とはいえ特にこれといった案も浮かばず、基本に帰ってVOICE→ボイス→「声」でいいのではということに。それで、「私の声が聞こえますか？」という文章を英語に翻訳してテーマにしようかとも考えたが、結局今年はサブタイトル無し、「VOICE' 04」の文字をデデンと大きく掲げることになった。

青を主体にした今年のイラストが7月下旬に仕上がりに、出演者交渉、広報の準備段階に入る。ところが交渉終了後の出演予定者の1組と何の連絡も取れなくなり、フライヤーに掲載する出演者のプロフィールが入稿前日になってもまだ完成されていないというピンチを迎えた。どうにか生島さんのコネクションによって問題は回避され、無事にフライヤーも予定の10月中旬に納品された。

私がVOICEボランティアに参加するのは今回が初めてであったが、皆さん曰く、今年の準備はスムーズに行われた。これまでの反省点を生かすことができたのだろう(当然なんだけど、汗)。クラブやハッテン場等へのフライヤー配布には担当がうまくいかないこともあったが、ウェブにしる配布物作成にしる、今年はすべてが順調に行われていたように思われる。毎年恒例の(?)VOICE前日オールナイト労働祭は今年はなかったし(よかったあ)。まあ、これはボランティアスタッフ間の話であって、生島さんはぶれいす東京の出し物であるビデオを前日夜通して編集し、仕上げたのは当日の朝7時。ギリギリだったが、十分にチェックを入れる時間はあった模様。何はともあれ、本番までには準備完了！

そんなこんなで11月27日に開催されたVOICE' 04。当日のボランティアも受付班と舞台裏班に分かれ、無事成功に終わらせることができた。来年はさらに段取りよく準備していきたいと思う。



当日受付にて準備作業

■今年の製作物

1. 「Living Together Letters」(冊子)

瀧見

今年初めに、2丁目のaktaで開かれた、田口弘樹さんの写真展に合わせるかたちで、はじめたLiving Together Letters。HIVとともに生きるたくさんの人に、誰かに宛てた手紙というかたちで、自分の想いを書いてもらう。その手紙を読んだ人がまた、感じたことを誰かに宛てて手紙に書く、そんなふうには手紙が人の想いを繋げていったら素敵なんじゃないか…。



「Living Together Letters」の表紙

最初はそんな発想からはじまったLiving Together Lettersでした。メールや活字に慣れた自分にとって、手紙というのは少し忘

れかけていた表現方法でしたが、それぞれの手書きの文字で、それぞれの言葉で、書かれた手紙は、ほんとうにびっくりするぐらい、いいものでした。

やがてLiving Together Lettersは、たくさんの人が関わる大きなプロジェクトとして動きはじめ、手紙は、東京、大阪、名古屋、仙台、福岡、札幌と、この一年で、日本各地を巡りました。巡る中で、また新しい手紙が増え、合わせて、手紙のリーディングも、たくさんの人の声で読まれることになりました。

そして今回、これらの手紙の一部をまとめて、「Living Together Letters」というタイトルで冊子ができました。大切に持っていたくなるような素敵な冊子です。この一年で、思いもよらないほど、たくさんの人から人へ届くことになったLiving Together Letters。この先さらに、もっともっと広がってほしいなと思います。

2. コンドームケース

「いつでも、どこでも、だれとでもコンドーム！」を合言葉に、カッコよくコンドームを持ち歩けるようにするにはどうしたらいいか…?という事から始まった「コンドームケース」プロジェクト。



おやかた

一昨年の「VOICE' 02」で、初めてオリジナルのコンドームケースを製作・配布しましたが、おかげさまでこのケースはなかなか好評。その後再注文して、VOICE以外のいろいろなイベントでも配布させていただきました。そこで、今年もオリジナル・コンドームケース第2弾を作成しました。今回は布製のソフトケースでしたが、今回は仕様を変えてアルミ製のハードケースタイプ、しかも「LIVING TOGETHER (赤・青の2タイプ)」のオリジナルロゴ入りです。見た目にもカッコよく、キーホルダーがついているので、カバンやズボンに下げても使えます。

今年の「VOICE' 04」で来場者、出演者、スタッフ合わせて約500名に、このオリジナル・コンドームケースが配られました。このニューバージョン・オリジナル・コンドームケースを、まだ見たことない人&持っていない人は、要チェックでッス!!

3. ビデオ「POSITIVE VOICES」

生島 嗣

走る列車の運転席から見た線路の映像が、がたがたと揺れながら、何処までも続いている。途中で、インタビュー参加者の朝食のメニューが語られる。「朝はちょっと、だるかったので、何も食べられませんでした」「朝は今日はコーヒーしか飲んでいません」「エーと、パンとヨーグルトとジュースでした」、「シリアルとバナナです」、「明太子のおにぎりですね」。一人一人の生活が想像されるオープニング。

今回のビデオ「POSITIVE VOICES」の制作には7人のHIV陽性者と1人のパートナーが参加してくれた。映像は、体の一部、手、口、目などを撮影し、インタビューの音声とで構成した。どのような映像になるかを確認してもらいつつ、全国各地で撮影を行った。

「HIVに感染しているんだ」と知らせることで始まる、それぞれのストーリーを、本人の語り(VOICE)で。彼氏に、友達に、家族との間でやり取りされた経験談。「そうだと思った」、「ばかー」、「家族に二度と会わないように」、「体は大丈夫?」、「それで〜」。様々な反応が語られる。心あたまる話もあれば、聞いている側も辛くなってしまうことも。

参加者一人一人にとり、「とっておきのプライベート情報」を知らせたいというHIV陽性者の気持ちと、聞いた側の反応が語られることで、見ている人の心を揺さぶる。

最後に、このビデオの制作に、撮影にご参加いただいた、一人

一人に感謝したい。このビデオでカミングアウトすることになって、も構わないといってくれていた出演者の方に、上映後、やはり迷惑をかけたのではと不安になり、メールを送った。すると、こんな返事が戻ってきた。「やはり映像ものって難しいですねえ。このプロジェクトを今後も継続していく場合の課題ですね。それでも、ここで立ち止まらずに、少しずつ前進していかなければ、何もかわってゆかないし、頑張って下さいね。ってか僕も頑張ります!!」



出演：7人のHIV陽性者+1人のパートナー
企画：張 由起夫、松原 新 (Rainbow Ring)
生島 嗣 (ぶれいす東京)
取材・撮影・構成：生島 嗣 (ぶれいす東京)
編集・構成：今泉浩一 (habakari-cinema)
編集補助：岩佐浩樹 (habakari-records)
音楽：ogurusu norihide
著作・制作：ぶれいす東京 Gay Friends for AIDS
後援：(財)エイズ予防財団
Living Together 計画 参加作品 2004.11.27

「ビデオを見て～身近に感じたこと～」

ふな子

7人のHIV感染者と1人の感染者パートナーが質問について答えるという、ぶれいす東京制作のビデオが一番印象に残っています。もしビデオに、モザイクがかかっていたり、変声していたりしてたらすごい後ろめたく感じたと思うけど、映像には話をする人のパーツ(目、口、手とか)が写っていて、その人の声で言葉が紡ぎ出されていたので、とても身近で、友達から語りかけられているカンジでした。

どんな質問があって、どんな答えがあったかあんまり覚えていないの。でも、その人自身の言葉で、その人が考えてることってことが表現されていて、HIVって特別なモノじゃないし、ホントに身近なコトだなあと改めて感じました。

色々な質問の中でとても素敵だなとおもったのは、「感染が分かってから嬉しかったことは何ですか?」という質問があったことでした。感染が分かって辛いこと、大変なことを伝えることも大事かもしれないけど、そうじゃなくて嬉しかったことは?という質問と答えから、感染したら「終わり」じゃなくて、楽しいことも、嬉しいこともあるんだよっていうとても前向きなメッセージをもらった気がしました。

普段、大阪でエイズのボランティアをしていながらも、どこかHIVとか、その病気と生きてる人のことを、少し遠くに、自分と切り離して感じていたかとも、気がつきました。このビデオを見てから「Living Together」という言葉をずっと感じています。

PLWHA (People Living with HIV/AIDS) ミーティング 開催

長期療養シリーズ 第2回 「治療にともなうストレスのコントロール」

JaNP+ とぶれいす東京が共催している PLWHA ミーティング・長期療養シリーズの第2回が、2004年10月31日に東京都内の会場で行われ、40名以上の陽性者の参加がありました。

ミーティング概要

司会：JaNP+ 代表 長谷川博史

1. 「ストレスとその反応のメカニズム」
東海大学／精神保健福祉士 菱川 愛
2. 「『HIV陽性者のストレスに関するwebアンケート調査』の結果から」
ぶれいす東京専任相談員／社会福祉士 生島 嗣
3. 「ストレスのセルフコントロール&ケア」
大阪教育大学／臨床心理士 野坂 祐子
4. 「HIV 診療の現場から」
東京都立駒込病院感染症科／看護師 有馬 美奈
5. 「様々な場面で利用可能な地域におけるリソース活用術」
うつ・気分障害協会(MDA)／保健師 山口 律子
6. 質疑応答

主催：JaNP+ ぶれいす東京

後援：セローノ・ジャパン株式会社

「PLWHA ミーティング報告」

矢島 嵩

HAART の登場から7年がたち、長期服薬によるさまざまな問題が新たに注目されるようになりました。2003年にはPLWHAミーティング・長期療養シリーズの第一回が、「患者のQOLと自己決定権」「長期服薬による副作用や容姿・体形の変化」といったテーマで開催されました。

第2回目である今回は、「治療に伴うストレスのコントロール」がテーマです。ただでさえストレスの多い現代社会で、さらにHIV陽性者ならではのさまざまなストレスもあります。また、一部の抗HIV薬が鬱傾向を促進させるという報告もあります。このような状況の中で、長い治療生活を通して身体的にも精神的にも健康を維持し、より良く生きるために、陽性者自身がストレスをマネジメントする方法を日頃から学ぶ機会が必要なのではないかと考え、このミーティングが開催されています。

今回は、メンタルヘルスやHIVに関わるさまざまな立場の方々にごゲストとしてお話をいただきました。まず菱川さんから、そもそもストレスとは何か、ストレスのメカニズムについて。野坂さんからは「ストレス・マネジメントのABC」。A = Awareness(ストレスとストレス反応に気づく)、B = Balance(生活や、自他のバランス)、C = Connection(他人や、情報とのつながり)といったことを中心に、当事者ができるセルフコントロールについて。駒込病院の有馬さんからは、「感染した自己の受け入れ」「他者への感染通知と関係性の調整」「医療者との関係の構築」「身体状況・服薬による生活調整」「性行動のコントロール」「身体状況とメンタ

ルヘルスの連動」といった、HIV感染に伴う生活体験についてのインタビュー結果を報告していただきました。最後に、山口さんから「自分のサポーターを探そう！」と題して、一人で悩んでいるときに利用できる社会資源として、電話相談や精神科専門医やNGOといった具体的な情報提供と、それらの「役に立つ利用術」のお話がありました。

また、ミーティングに先立ち「HIV陽性者のストレスに関するwebアンケート」が行われました。106名の陽性者の回答を得たこの調査の中間報告が今回のミーティングでも行われました。ストレス反応の質問に対する回答の結果、約半数が高ストレス群で、その内の64%が「この1年間に精神的なバランスをとるのが難しくなった」と回答しています。原因であるストレスは多岐にわたります。全体的には「人生の見通しがつかないこと」「周囲のHIVへの無理解や偏見に接すること」「HIV感染による身体的／体力的きつさ」、服薬経験者に限ると「服薬による副作用」「体形や容姿の変化」といった項目が上位を占めました。また、自由記述部分もたくさんの記入があり興味深い内容となっています。特にストレスに対する自分なりの対処方法や、HIV陽性者として感じているストレスについて様々な体験や意見を書いていただきました。アンケートにご協力をいただいた皆様にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

このアンケート調査の最終報告は、小冊子にして発行する予定です。

「ミーティング見聞録」

山田のかかし

PLWHAミーティング「長期療養シリーズ」には、貴重な情報収集の場として参加させてもらっている。タイムリーな話題を取り上げ、専門家の話を聞ける機会を提供してくれる主催者には心から感謝したいと思う。

クスリの選択肢がなく、新薬の登場に一喜一憂していた以前と、現在とを比べると格段の差を感じる。先が見えず、自分と社会を遮断し、家に引きこもり、副作用と闘いながら薬を飲み続けなければならないストレスを体験したのは私だけではないと思う。それだけでなく、病気に対する差別・偏見というストレスを抱えてのことであるから二重の重圧に押しつぶされそうだった。

そんな中で、私を支えてくれたのは、同じ立場である陽性者の明るい笑顔である。一緒に闘っている仲間が存在に何度助けられたことだろう。

ストレス解消法は、個人によって色々だと思うが、私の場合は、「正確な情報を得る＝問題の整理」「自分ひとりだけではなく、他にも同じ問題で闘っている人がいることを認識する＝問題を分かち合うことで負担を減らす」である。前向きに生きている仲間のエネルギーが私のストレスを吹き飛ばしてくれると信じているからだ。いち長期療養者として言わせていただくなら、一人で何でも抱え込まないで、上手く他者の知恵と力を借りることも大事なことでないだろうか。

2004年11月20日に、大阪の扇町公園で行われた、HIVの予防と共生のイベントがMASH大阪の主催で行われました。地域を越えたコミュニティ・ネットワーク促進の一端として、他の団体とともにぶれいず東京もLiving Together写真展や、HIV陽性者・支援団体のブースに協力・参加してきました。

「PLuS+ と Living Together ブース」

瀧見

2004年11月20日、MASH大阪主催のPLuS+というお祭りが開催され、Living Togetherブースのお手伝いで参加してきました。会場の扇町公園は大勢の人で賑わい、野外ステージでは、数々のショーやライブペインティング、さらに、まわりを囲む色とりどりのテントでは、お芝居、カフェ、屋台、フリーマーケット、展示など、様々な催しが繰り広げられました。



扇町公園のメインステージ



Living Together ブース

Living Togetherブースも300人近くの人に会場していただき大盛況！！

天気の良い休日の午後、心地いい時間が会場に流れていました。いいなあと思ったのは、普通に公園に散歩にきていた男女のカップルや、犬の散歩中の家族連れ、サッカー少年、買い物帰りのおばちゃんなどなど、いろんな人がミックスして、さらっとではあっても、お祭りの場を共有していたことです。

ともすれば内輪だけで盛り上がってしまうことが多いイベントの中で、とても風通しがいいお祭りになったのではないかなと感じました。さて、次回も開催が決まったPLuS+。今年は行けなかった人も、来年は大阪へ、おいしい食べ物とお祭りを楽しみに出かけてみませんか？

「PLuS+ @扇町公園のブース参加感想文」

HEARTY NETWORK 代表 館林 稔

MASH大阪による予防イベントPLuS+が開催された11月20日は朝から快晴に恵まれ、汗ばむほどの陽気でした。

今回初めての東京以外でのイベント参加でしたが、すでに顔なじみも多く、JaNP+さん、ネストさん、そして今回初めてイベントにブースを出す大阪のFollowさんがすでに集まっており、遅まきながらの会場着となりました。

今回のイベントでまず特筆すべきことは、予防イベントの中で、JaNP+、ネスト、Follow、HEARTY NETWORKという当事者団体が同じブースに顔を連ねたことでしょうか。更に大阪で外国人支援をしているCHARMさんも同じブースに参加され、「当事者性」と「支援」という特徴の前面に出たブースでした。

小さいながらもブースは充実した閲覧スペースになっており、JaNP+の展示パネル、JaNP+、CHARMが提供する各国の感染者支援に関する資料など国内では入手困難な貴重な資料も展示され、ネスト、Followの初めてのパンフレット、そしてHEARTY NETWORKのパンフレットなど当事者支援団体によるパンフレットも配布されました。感染者支援の老舗ネストと大阪発の支援団体、ニューフェースのFollowが同じ日に、同じ場所で、パンフレットのお披露目というのも、今回のブースの見どころだったと思います。

通常イベントの効用は来場者への活動のアピールという面が強調されがちですが、期せずして活動をする者同士の交流が生まれるという側面もイベントの楽しみの一つかもしれません。予防活動に比して、支援活動は同じ支援活動に携わる人々と一同に会する機会が少ないこともあり、今回は情報だけでなく、言葉にならないさまざまなものを共有する良い機会となりました。

第18回日本エイズ学会学術集会（静岡）参加感想文

「第18回日本エイズ学会学術集会・参加感想文」

福原 寿弥

東静岡駅のホームに降り立つと、サッと視界が開けて、思わず清々しい朝の空気を一息吸い込んでいました。モダンなコンコースを抜けると、目の前にはどことなくヨーロッパの建物を思わせる巨大な会場が現れ、ちょうどそのてっぺんに向かって、飛行機雲が一直線に空を分けていました。爽快な滑り出しです。

今年度の日本エイズ学会学術集会は、12月9日（木）から3日間、静岡県立こども病院の三間屋純一会長によりとりおこなわれました。会場は静岡県コンベンションアーツセンター・グランシップ。10階の展望ロビーからは富士山、日本平に箱根も望める、綺麗で合理的な建物でした。プログラムは7つある会場ごとに、テーマが比較的整理されていたせいもあり、とてもシンプルでバランスのとれた印象を受けました。また、会長講演に関連した「HIV感染症と血友病」

と題されたシンポジウムの開催や、優秀演題の採択、行政主催の公開イベントなど、新たな試みの部分も感じ取れるものでした。

例にもれず、今回も見たい・聞きたい演題が目白押しでしたが、迷いながらもいくつかのセッションに参加しました。医療体制・ソーシャルワーク・性感染症・セクシャルヘルスと、興味の偏りにはご容赦願いますが、そんな中いくつか共通した印象を得ました。一つは、日頃CBO (Community Based Organization) として東京周辺での活動が中心となっているぶれいす東京に関わっていると、個人的に地方の現状は話聞く程度だったりしますが、いくつか地方からの報告を聞いて、都市部との違いを再認識すると共に、都市部に近づいてきているという状況に驚きを感じました。また、このまま増え続けると…等の発言がいろいろなセッションで聞かれ、えもいわれぬ緊迫感を覚えました。

さらに、数多く組まれたシンポジウム・セミナーにおいて印象に残った言葉は”Once Daily”と”即日検査”でした。日本でも承認された、一日一回服用の抗HIV薬の使用経験を踏まえた報告が複数あり、新しいガイドラインと共に、より現実味を帯びて響いてきました。また、いくつかの保健所・クリニックで行われているHIV抗体即日検査の結果・評価をもとに、現在の検査体制に関するいろいろな意見を聞くことができました。

今回の学会に参加して、最新治療の動向を始め、毎年移り変わる部分について根拠を持って新たにすることができました。また、以前から問題といわれ、どうにかしなければならぬと問われ続けている課題については、なお浮き彫りにされた思いがしました。様々な現場で感じられている状況と、予算措置など現実問題との食い違い。参加者の方々もそれぞれに感じ取られたことでしょう。これからも皆さんと考えていきたいと思いました。

「第18回日本エイズ学会参加報告」

牧原 信也

今回は2年ぶりに学会に参加し、発表も行ってきました。前回の発表はパディ活動についての考察でしたが、今回は、平成15年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究」の分担研究、小西班の「身体に障害を持つHIV陽性者・家族の社会資源の利用調査に関する考察」、について行いました。対象は都内近郊に在住の陽性者で、身体に障害を持つ方とその家族の合計4ケースについて、質的な調査を半構造化面接法で実施しました。調査では、都内近郊で在宅生活を行うにあたってのメリットや、在宅移行時にあたってのコーディネーターの重要性、地域での社会資源の開発等を考察しました。パディ派遣担当者でもある自分にとって、依頼者をより知ることができ、また研究者として実態を把握し分析するという、とても良い機会を持てたと思います。

今後発症で感染に気付いた方の中に同じようなことが起こりうるとすれば、こうした情報を多くの方に知ってもらうことは重要だと考えられます。既に支援を行っている方にも、経験のない方にも、今後の支援のあり方を考える機会として、いろいろな状況を想像する機会となってもらえればと思います。調査自体は大変でしたが、分析を他の研究者と共にっており、内容としてセッションに参加いただいていた方にも興味深いものになったのではないかと考えています。

(あくまでも自己満足かもしれませんが…)今回調査にご協力いただいたみなさま、本当にありがとうございました。

自分が発表を行った「ソーシャルワーク」のセッションは、同じ小西班の他の調査、「HIV感染者の社会生活に関する実態調査」「社会福祉施設のHIV感染者の受け入れに影響する要因について」の発表と、一緒に調査を行った大内さんの「HIV陽性者を介助する母親のストレスと対処」の4演題となっており、その他の発表がなかったのは寂しいところでしょうか。ケアと予防がセットであることが望ましいと考えれば、さまざまなケアに関する発表がもっと多くあって欲しいと思うところでもありました。またその他のセッションに関して、「在日外国人」「NGO/CBO」のセッションなど、最終日の午後とあってか、参加者が少なかったように感じました。興味深かったのは「MSM」「感染者とセクシャルヘルス」のセッションがあったのですが、こうしたセッションが学会であったのは初めてだったような気がしました。(これまでMSMは予防のセッションであったのでは?)

ともあれ、学会が終わると「ほっ」とする反面、自分の知識のなさやいろいろな取り組みに刺激されて、なんだかまた来年もこれるといいなあ…、なんて感じながら帰りました。

「始めてエイズ学会に参加して」

大内 幸恵

このたび、初めてエイズ学会に出席し、発表をする機会を得ました。すべてのシンポジウムや分科会に出られたわけではないのですが、3日通しての印象は、いろいろなことに驚いたということです。

やはり医学系の学会であるのだということ、予防対策、保健医療の議論は盛んであっても、社会福祉・ソーシャルワーク系の直接的支援にかんする議論が少なすぎて(ほとんどなくて)残念ということは、参加前から思っていました。まず、私はHIV陽性者を介助する母親のストレスについての発表を行いました。そういったHIV陽性者の社会生活の難しさに焦点をあてた社会学的研究が、なぜソーシャルワーク部会に入れられるのか、それが驚きでした。ソーシャルワーク部会ならば、ソーシャルワークの実践や実践理論研究が発表されるべきだと思うのですが……。

また、今回の学会ではHIV陽性者の支援そのものを議論する機会がないように思えたことも、驚きでした。予防対策がケア・人権保護にもつながることは理解できるのですが、それだけで支援・ケアが終わるわけでもないと思います。そのため学会に参加しても今後の長期化をみすえたHIV陽性者の「支援」の方向性や理念、その内容が、全くわかりませんでした。

ラフな服装で(学会発表=スーツ着用が当たり前と思っていたので、これもびっくりしました)自分たちの予防啓発活動を発表しているNGO/NPOの報告を聞き、シンポジウムに参加したりして思ったのは、これからのエイズ対策は、医療的支援はもとより、よりいっそう予防対策の推進が図られていくのだろうな、ということです。HIV陽性者の急増を背景に予防対策を中心に対策が進められている現在、HIV陽性者の社会生活の支援とは何を意味するのか、どうあるべきか、制度・施策の問題点は何かといった議論を活発にしていることも、これから必要となるのではないのでしょうか。

ところで今回の学会で一番印象的だったのは、初日の会長シンポジウムでした。HIV感染症と血友病というテーマで、

医療者、ジャーナリスト、当事者、患者会、社会学者、様々な視点からの回顧と未来の展望が話されていました。過去の医療的支援、マスコミの反省、薬害発生のしくみ、患者会の責任など、それぞれの立場の言葉は重く、大変貴重な話を聴くことができました。現在の活動に埋没することなく、過去の歴史を学んで、そこからエイズ対策の目的、その施策のあり方を捉え返すことは、これからの日本におけ

るHIV陽性者支援活動やエイズ対策を考えていくうえでも重要だと思いました。

このように驚かされること、考えさせられることが多いエイズ学会でしたが、様々な立場の報告を聴くことができ、とてもよかったです。来年はどんな学会になるのか、楽しみにしたいと思っています。

活動報告他

— 各部門より —

ホットライン

エイズ電話相談（ぶれいす東京および東京都委託）

◆ホットライン・ミーティング他実施状況（）内は出席人数

10月

- 1日 東京都エイズカウンセリング研修会（5名）
- 8日 東京都電話相談連絡会（5名）
- 10日 HL部門研修1日目（スタッフ6/研修生6名）
- 16日 世話人会（6名）
部門研修1日目補講（スタッフ3/研修生3名）
- 17日 部門研修2日目（スタッフ13/研修生8名）
現役スタッフ&研修生交流会
スタッフミーティング（18名）
ケースカンファレンス
- 22日～ 研修生、順次モニタリング/実施研修開始

11月

- 12日 東京都電話相談連絡会（4名）
- 21日 世話人会（4名）
スタッフミーティング（10名）
ケースカンファレンス

12月

- 11日 臨時世話人会（7名）
- 17日 東京都電話相談連絡会（3名）
- 19日 世話人会（5名）
HL部門忘年会&新人歓迎会（22名）

◆相談実績報告

— ぶれいす東京エイズ電話相談 —

	10月	11月	12月
日数(日)	5	4	4
総時間(時間)	20	16	16
相談員数(のべ人)	15	12	12
相談件数(件)	39	28	40
うち(男性)	32	24	35
(女性)	7	4	5
(陽性者)	0	1	1
1日平均(件)	7.8	7.0	10.0

— 東京都夜間・休日エイズ電話相談（委託）

	10月	11月	12月
日数(日)	15	9	12
総時間(時間)	45	27	36

相談員数(のべ人)	44	27	31
相談件数(件)	279	180	251
うち(男性)	242	152	201
(女性)	36	28	49
(不明)	1	0	1
(陽性者)	5	1	4
1日平均(件)	18.6	20.0	20.9

※ 11月最終週はJHC36時間相談のため、都相談業務は休止

年末の通話増加は毎年の傾向ですが、今回は特に神経症的な一部の特定リピーターが件数を押し上げてます。一方、新規相談者から年末駆け込み受検に対する不安相談も例年の如く多く聞かれました。迅速検査の普及や、都による抗原抗体検査の導入など、去年は検査背景も大きく様変わりしました。新スタッフを迎え、内外的にも変革の時期を迎えたHL部門への変わらぬご支援を、今後とも宜しくお願い致します。

(報告：沢井)

ぷ☆PEP

若者による若者のための予防啓発活動

新しくスタッフが増えました。今後の活躍が楽しみです。

★ミーティング

- 10月 2日 クラブイベント準備ミーティング
- 10月 12日 定期ミーティング
- 10月 21日 臨時ミーティング
- 10月 26日 臨時ミーティング
- 11月 19日 新人スタッフ説明会
- 12月 6日 定例ミーティング

★メール相談

- 10月 4件 (女2件 男1件 不明1件)
- 11月 3件 (女3件 男0件 不明0件)
- 12月 1件 (女1件 男0件 不明0件)

◆携帯サイトのリニューアルの準備が進んでいます。

◆クラブイベントをガイ・グループと共同で開催企画中です。

2005年5月、2005年12月に開催を模索中。

◆スタッフ派遣

11月6日(土) →地震のため中止

「高校生のためのセクシュアルヘルスを考えるワークショップ」
新潟県 ながおか市民センター

11月24日
 全国高等学校PTA連合会主催
 高校生の心身の健康を育む家庭教育シンポジウム
 スタッフ2名を派遣

(報告：柳田)

バディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

◆バディ担当者ミーティング参加スタッフ数

(第1木曜11:00～ 第3木曜18:30～)

10/7 4人 10/21 5人
 11/4 3人 11/18 4人
 12/3 3人 12/16 4人

※12月の第1木曜日のミーティングはフォローアップトレーニングに合わせ12月3日の16:30～18:00に開催。

◆利用者数

5カ所の病院に通院中、もしくは入院中の17名の方に18名のバディスタッフを派遣。

◆訪問先 (2004/12月末現在)

在宅訪問 13件 病室訪問 3件
 在宅への電話のみ 1件

◆バディ担当中のスタッフ構成 (12月末現在)

女性12名 男性6名

◆バディワークショップ

11月3日(祝) 10:00～17:00
 参加者 8名 修了者 8名

◆バディフォローアップトレーニング

12月3日(金) 19:00～21:00
 参加者 10名「バディの経験を振り返る」
 講師 野坂 祐子
 スピーカー：九岡 美知子 野村 洋子

90年代後半から長期に渡り活動しているバディのお二人から、これまで関わったケースについてお話を伺いました。また、活動する中でストレスとは何か、ストレスについて野坂さんより講義していただきました。

◆バディの現場から

11月3日(祝)のワークショップで8名のバディが増員され、その後それぞれで活動に早速加わっています。これにより少しでも充実した活動ができればと考えています。

また、12月3日のバディフォローアップトレーニングではバディ活動についてスピーカーのみならず参加者それぞれが自分の活動を振り返る機会になったのではないかと思います。

今後も研修を定期的に行なっていきたいと思いますので、皆様ぜひともご参加下さい。(報告：牧原)

ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのスペースとプログラム

◆ネスト利用状況

	オープン日数	延べ利用者数	(うち新規) (*ファシリテーターなど)	
10月	26日	164名	(3名)	(7名)
11月	26日	131名	(12名)	(13名)
12月	25日	143名	(4名)	(8名)

(*はファシリテーター、web NEST運営委員、お茶会、講習会などの企画・運営などの役割を担っているネスト利用者)

◆ピア・グループ・ミーティング (PGM)

- ・新人PGM第19期(参加者5名)
10/2 10/16 10/30 (修了)
- ・新人PGM第20期(参加者6名)
11/6 11/20 12/4 12/18 (修了)
- ・陰性パートナー・ミーティング
10/9 (4名) 11/13 (4名) 12/11 (6名)
- ・ミドル・ミーティング
10/9 (3名) 11/13 (2名) 12/11 (6名)
- ・カップル交流会「ハロウィーン・パーティ」 10/31 (20名)

◆学習会/イベント

- ・10/25 ストレス・マネージメント・ワークショップ(参加者5名)
- ・10/31 PLWHAミーティング「治療や服薬に伴うストレスのコントロール」(講師4名 参加者40名)
*JaNP+との共催、詳細は10頁をごらんください
- ・11/6 ネスト庵秋のお茶会(参加者10名、ご亭主1名)
- ・12/13 ストレス・マネージメント・ワークショップ(参加者4名)
- ・12/19 ネスト年末パーティ(参加者21名)

◆ミーティング () 内数字は各(陽性者メンバー/ぶれいす東京スタッフ)

- ・新陽性者PGMファシリテーター・ミーティング
11/5 (5, 4)
- ・新陽性者PGM効果評価ミーティング
10/12 (2, 3) 11/2 (2, 3) 12/7 (2, 3)
12/21 (2, 3)
- ・web NEST運営委員会
10/21 (1, 2) 11/29 (2, 2) 12/17 (2, 2)
- ・ネストのあり方を考える会
10/26 (1, 6) 11/8 (1, 6)

◆ネスト年末パーティ

12月19日(日)、ネストで年末パーティが開かれました。今年は都合で池上代表が参加できませんでしたが、参加者21名にスタッフ4名で、軽食をつまみながら午後ひとときを過ごしました。久しぶりにみえた方や時間をかけていらした方もいて、普段顔を合わせない方たちが交流する機会ともなりました。差し入れをくださった方、お手伝いしてくださった方、どうもありがとうございました。



ネストの年末パーティー

◆ぶれいす東京/ネストの、HIV陽性者とその周辺の方のためのサービス案内のパンフレットができました。必要な人に情報が届いてサービスが利用できるようにコンパクトで手に取りやすい形のパンフレットです。

入手希望の方は、ぶれいす東京事務所までご連絡下さい。尚、このパンフレットは当事者(又は当事者への配布)のために作られたものですので、研修目的などのための無料提供はいたしておりません。(報告者：はらだ)



For yourself, your partner, your family, your friends

Gay friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動

http://gf.ptokyo.com

◆ Gay Friends for AIDS 電話相談

10月 9件 (平均1.8件)
11月 12件 (平均3.0件)
12月 11件 (平均2.75件)

◆ イベント「PLuS+」(詳細は11ページ)

11月20日 於：扇町公園(大阪)

MASH大阪主催のHIV/AIDS予防啓発運動。GフレはLiving Togetherのブースを設けて手紙集を展示、200人以上の方々に入場して頂きました。ふらっと入ってきたおばちゃんやおじいちゃん、若い男の子、女の子もけっこう熱心に読んでくれて、とても和やかな雰囲気でした。

◆ VOICE'04 (詳細は8ページ)

11月27日 於：新宿区立四谷区民ホール

観客動員394人 出演者70人 スタッフ40人

◆ Living Together Lounge 於：advocates tokyo

10月17日 出演者：金丸正城 (Jazz Vocal)

バンド：TAKERU (piano)

新岡 誠 (bass)

長谷部 健一 (drums)

11月21日 出演者：bwrighte (R&B系Vocal)

with：mashinon (Vocal)

kenken (piano)

12月19日 出演者：シモーヌ深雪 (シャンソン歌手)

出演者の方々のライブと「言葉」とお酒…まったりとした休日の夕方を来場者の皆さんはエンジョイされていました。

(報告：タカシ)

HIV陽性者への相談サービス

◆ 相談実績

2004年	10月	11月	12月
電話による相談	38	41	42
対面による相談	31	38	19
E-mailによる相談	77	110	61
うち新規相談	7	13	9

◆ 新規来訪者情報源 (N=29)

インターネット：14

ポジティブの友達：3

医師：3

検査所：2

印刷物：2

友達：1

不明：4

◆ 新規相談者の属性 (N=29)

HIV陽性者 (男性：24 女性：1)

配偶者 (女性：2)

兄弟姉妹 (女性：1)

不明 (男性：1)

◆ 新規相談者の相談内容

近親者の陽性を知った後の混乱

告知後の医療機関通院への不安、失業、経済的な行き詰まり
新人PGMへの参加、精神的な行き詰まり
外国人の超過滞在者の治療に関する相談
入院時の職場とのトラブル、生命保険に関する相談
脱法ドラッグについての相談

◆ コメント

外国人への支援など、他団体とのネットワークの強化が必要。
また、相談員のスキルアップの必要性を痛感。(報告：生島)

研究部門

厚生労働省委託 厚生労働科学研究

◆ 「HIV感染予防対策の効果に関する研究」(2003年度～)

9月に引き続き10月以降も、各種団体や学会等向けに「性/エイズ教育におけるピア・アプローチの実態とニーズ調査」を実施、最終的に110通の回収を得ました。また、自治体向けの「若者の性の健康」取組状況調査の結果から、行政における興味深い取組事例につき個別インタビュー調査を行いました。その他、人材育成事業として(財)日本性教育協会と「性教育のための実践セミナー」を2月5日(土)6日(日)に連続開催、ビデオ「Let's CONDOMing」の効果測定調査他と合わせ、今後年度報告のまとめを行う予定です。

(財)エイズ予防財団助成 研究成果発表会

◆ 『Living Together - HIV陽性者参加型のMSM予防啓発手法の開発-』

8月から引き続き10月末までの会期にて、「Living Together」をテーマにした新しい普及啓発の試みをぶれいす東京企画・運営にて行い、総計587名の方のご参加を戴きました。

◆ 『地域で働く仲間として - HIV陽性者の就労支援について -』

HIV感染症の医療体制の整備に関する研究班(厚生労働科学研究)は、「HIV感染者の療養生活と就労に関する調査研究」を昨年度行いました。当班の分担研究者である桃山学院大学社会学部の小西加保留教授に協力して、この調査の全回答567票の集計をもとにした研究成果発表会を、調査にご協力戴いた全国5ヶ所の拠点病院のご協力を仰ぎ、開催しています。去る11月17日には福岡市(対象：九州地域)、11月20日には大阪市(対象：近畿地域)にて発表会を開催、当日は研究班の他、医師、コーディネーター、ナース、ソーシャルワーカー、陽性者、人事担当者などの方々にご講演戴き、両発表会合計で100名以上の方にご来場戴きました。

尚、福岡、大阪での開催に続き、2月に札幌での発表会開催が決定しました。参加ご自由ですでお近くの方は是非お越しください。尚、同様の発表会を今後東京でも開催予定です。

札幌での発表会：

2月13日(日) 13:00-15:00

北海道大学 学術交流会館 第一会議室

(札幌市北区北8条西5丁目、会場電話：011-706-2141)

◆ 『セクシュアル・ヘルスってナニ? Part2 ケアと予防を見直す戦略 - 青少年の性の保健行動 -』(詳細は2~4ページ)

12月1~5日にかけて、kavcaap(アジア・太平洋地域エイズ国際会議<略称ICAAP>の文化芸術部門)2004のイベントの一環として、神戸にて研究成果発表会を開催。「Living Together展」と銘打ち、厚生労働省委託の研究成果発表を中心、写真展・手記リーディングなどにより「HIVと既に共に暮らしている私たち」を実感する試みを実践しました。各催しの参加者合計は472名にのぼりました。(報告者：吉田)

書籍紹介 「Quiet Storm (静かなる嵐)」

～ HIV / エイズとたたかう人々の勝利のために～

アジア太平洋地域のHIV陽性者の声を伝える本が出版されました。本の収益はアジア太平洋に暮らすHIV陽性者の支援に充てられます。既存の基金や政府間援助を受けることのない、草の根レベルの当事者団体が対象とされています。この本を購入して、アジア太平洋のHIV陽性者の支援に参加してみませんか！

●書籍紹介：シェア＝国際保健協力市民の会 沢田 貴志

HIVを持ちながら生きているアジアの人々に私が出会うようになってからもう10数年の歳月が流れました。10年前のタイの農村ではHIVに感染した若者達は差別と偏見の恐怖から検査を受けることも治療を受けることもままならず不安と絶望の中で命を縮めていました。しかし、誰もが黙ってこの状況に耐えていたのではありませんでした。農村では妊婦検査で告知された若い母親達が、都市ではVCTセンターや病院に集う若者達が十人そして百人と集まり声をあげ始めました。病気の学習から生活再建の相談までさまざまな活動で仲間を支え合い、次第に力をつけていきました。やがてHIV陽性者の全国組織を作り、大臣交渉の場を持ち政府にHAARTの無料化政策を約束させるに至りました。

もちろんアジアでタイはまだ例外的な成功例かもしれません。国によって状況は大きく違っています。まだ多くのHIV陽性者が差別と偏見の中で配慮のない告知を受け絶望の淵に追いやられています。また、HAARTどころか日和見感染症の治療すら経済的な理由で受けられない場合がしばしばです。しかし、そんな困難な状況の中でいま静かな変革の息吹が始まっています。インドで、カンボジアで、インドネシアや他の国々でも始まったこの息吹は、はたして大きな風を起こしHIV陽性者のおかれている状況を好転させる力となるのでしょうか。

そんなアジアのHIV陽性者の現状と声を伝える本が出版されました。「Quiet Storm(静かなる嵐)」です。2002年にUNDP(国連開発計画)が編集・出版したこの本は、アジア太平洋地域で生活するHIV陽性者の生きざまを写真とインタビューでつづっています。様々な困難の中で前向きに生きる彼らの姿は、差別や貧困、不寛容と戦うすべての人々に対して勇氣と希望を与えてくれるものです。是非手にとってみてください。

なお、今回発行された日本語版には、日本の陽性者3人を含む20人のアジア太平洋の陽性者が登場しています。収益は全て「アジア太平洋HIV陽性者支援基金」に寄付され、小規模ながらも各地で草の根活動を行っているHIV陽性者当事者団体の活動への支援に限定して使われるとのことでした。



※ぶれいす東京事務所でも購入可能です。見本も置いてありますのでご覧ください。

発行 国連開発計画 (UNDP)

発売 ポット出版

定価 1800円

※日本語版発行に関するコーディネーター・編集・執筆をJaNP+が行っています。内容や入手方法に関しては下記までお問い合わせください。

JaNP+ (Japanese Network of People Living with HIV/AIDS)

〒160-0014

東京都新宿区内藤町1-7

ホトクビル402

TEL 03-5367-8558 (火/金)

FAX 03-5367-8559

Mail info@janplus.jp

■ぶれいす東京より 賛助会員入会・寄付のお願い

HIV陽性者の数は年々増え続けています。新たな治療法は開発されていますが、治療を続けながら生活する上では様々な問題が発生しています。HIV陽性者とその周辺の人たちへの支援、コミュニティとして取り組んでいる予防活動、私たちの活動へのニーズがますます高まっており、必要な運営資金も増え続けています。よりよいサービスやプログラムを継続するために、ぜひ私たちの活動を応援してください。

賛助会員入会のおお願い

継続して応援して下さる方は賛助会員になってください。

--- 賛助会員になるには? ---

メールか電話/FAXで賛助会員入会をお申し込みください。折り返し、ぶれいす東京の案内と賛助会費専用の振込用紙をお送りします。

E-MAIL info@ptokyo.com

電話 03-3361-8964 FAX 03-3361-8835

年会費 個人賛助会員 (一口) 1万円

団体賛助会員 (一口) 10万円

寄付のお願い

そのほか随時寄付をお受けしています。ぶれいす東京の活動をぜひともご支援ください。ご寄付はいくらでも結構です。匿名でも可能です。

--- 寄付の振込み方法 ---

◇ぶれいす東京の活動全般に対する寄付

郵便局 郵便振替口座 No.00160-3-574075

特定非営利活動法人 ぶれいす東京 代表 池上千寿子

銀行 三井住友銀行 高田馬場支店 普通 2041174

特定非営利活動法人 ぶれいす東京 代表 池上千寿子

◇HIV陽性者への直接支援活動「ネスト/パディ」への寄付

銀行 東京三菱銀行 高田馬場支店 普通 1314375

特定非営利活動法人 ぶれいす東京 代表 池上千寿子

◇Gay Friends for AIDSの活動への寄付

銀行 みずほ銀行 高田馬場駅前支店 普通 5507255

特定非営利活動法人 ぶれいす東京 理事 生島 嗣

編集後記

- ・ 散歩コースにある花屋さん、色と香りに癒されます…。(こんどう)
- ・ 雪で真っ白な富士山がキレイです。富士山にむかってまっすぐ走っていったら、どこから富士山は見えなくなるんだろう？(サトー)
- ・ 44号と号外が同時期になりドタバタしてしまいましたが、みなさんのお陰で無事発行となりました。本格的な花粉の時期を前に一段落してホッ……。 (やじま)
- ・ 昨日、雪が降った。窓から眺めていると綺麗だとも思うけども、外にでると寒いし、靴が濡れて戸惑う。雪への備えは皆無に等しい、南国系血統の私。(いくしま)

編集・発行: 特定非営利活動法人 ぶれいす東京

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-22-46 ザ・テラス304

TEL: 03-3361-8964 (月-金 12:00~19:00)

FAX: 03-3361-8835

E-mail: info@ptokyo.com

ぶれいす東京HP: <http://www.ptokyo.com/>

Gay Friends for AIDS: <http://gf.ptokyo.com/>

web NEST: <http://www.jade.dti.ne.jp/~nest/>

Sexual Health: <http://shw.ptokyo.com>